日本近世の思想史研究が、今、すごくおもしろいことになっています

その時代のみんなが共有した社会通念・常識に目を向ける

僕の専門は日本思想史の研究です。思想史というと、難解で特異な学問と見られがちですが、そんなことはありません。たとえば江戸時代がどんな時代だったかを考えようとしたら、その時代の人々がどんなことを意識していたか、考えていたのかということが大きな問題になるはずです。そういう、ある時代の人々の意識や思想に焦点をあわせた歴史研究を、僕は思想史研究と呼んでいます。

つまり、思想史というのは、政治史や経済史、社会史など、どんな分野の歴史を研究するにしても基軸となる研究テーマだと思うんです。ところが日本では戦後ずっと軽視されつづけ、歴史学の主流にはなってきませんでした。

なぜか。一つには、戦前の日本思想史研究がいわゆる皇国史観を唱導し、侵略戦争を鼓舞してしまったからです。そのことが一種のトラウマになっていて、今も、日本思想史というとなにやらうさんくさいと見なされるようなところがあるんです。

また、戦後を代表する２つの思想史研究、すなわち荻生徂徠などの当代一流の儒学者を研究対象にした丸山眞男氏らの

思想家研究と、そういう研究は「頂点的思想家の研究」だと批判して、安丸良夫氏（一橋大学名誉教授）らが唱道した民衆思想史研究とが、それぞれ別個の研究として没交渉に進められてきたため、お互いの研究成果が共有できない状況にあるということも響いていると思います。

しかし、さすがに近年は、思想史以外の他分野の研究者も、歴史を叙述するに際して、人の意識・思想を取りあげるようになり、日本史研究の思想史化とでもいうべき状況が起こっています。

ところで、人の意識・思想に焦点をあわせるといっても、特定の個人、あるいは特定の階層の人々がどう考えていたかという個別の事例を羅列するだけでは、その時代の全体像は浮かびあがってきません。そこで僕が提唱しているのは、いわゆる頂点的思想家も、民衆も、さらには幕藩領主やその家臣団などもが共有していたであろう社会通念や常識に目を向けることで、総合的な思想史を構築していこうということです。

みんなが読んでいた書物を史料として歴史を叙述しようじゃないか

では、そういう社会通念や常識を知るには、どうすればいいのか。

僕は、その最もいい史料になるのが、書物、つまり本だと考えています。

これまでの歴史研究では、たとえば史料調査で地方の旧家などを訪ねても、手書きの古文書類だけをありがたがって、どこにでもあるような書物には目もくれないというのが一般的でした。しかし、江戸時代というのは、日本において初めて商業出版が成立し、さまざまな書物が日本各地の幅広い階層の人々に流布するようになった時代です。地域も階層も異なる多様な人々が、同じ頃に同じ本を読むようになった。それによって、一定のものの見方や考え方を多くの人々が共有するようにもなったのです。どんな本が、どんな人々に読まれていたかを分析することで、いろんなことが見えてくるはずです。

僕が1999年にまとめた『「太平記読み」の時代』は、まさにそうした試みの一つです。

『太平記』は南北朝時代の軍記物語で、その最大のヒーローは、超人的な知謀で敵を翻弄し、また後醍醐天皇に忠義を尽くす楠（木）正成です。ところが、江戸時代に入ると、軍事だけでなく政治の面でも卓越した能力を発揮し民を恵む仁政を行ったとする新たな正成像を提起した、『太平記評判秘伝理尽鈔』という書物が出現し、「太平記読み」がそれに拠りつつ講釈をして幕藩領主に政治と軍事のあり方を教えました。さらに、この書物が17世紀半ばに出版されるや、武家層から民衆までの幅広い階層の人々に読まれるようになりました。その結果、政治とはかくあるべきだという社会全体の政治常識が形成されることにもなっていったんです。江戸時代の政治というと賢い領主と無知な民<たみ>という構図で理解している人が多いかと思いますが、修正が必要です。「民は国の本」であり領主たるものは仁政を施すべきだという理念が社会全体に共有されていて、民は領主が仁君かどうか見ている。いわば民の視線を意識しながら、領主は民を治めていかねばならないのですから、時代劇に出てくるような〈馬鹿殿〉ではとても務まりません。

こうした観点から江戸時代という時代を読み解いてみると、現代の常識では理解しづらい武家や庶民のふるまいも、なるほど、それでだったのかと理解できるようになる。歴史的かつ総合的に把握できるようにもなる。そんな歴史の読み方を一つの事例として提示したのが『「太平記読み」の時代』なのです。

僕のこうした試みは、思いがけず、歴史学にとどまらない人文科学の幅広い分野の研究者から注目され、現在では「書物・出版と社会変容」研究会という、専攻の枠を超えた研究会活動にまで発展しています。この研究会の成果は、今年の『一橋論叢』10月号（134-4）にも1号まるごとの特集として収載されていますので、お目通しいただければと思います。（談）

社会学研究科助教授
若尾政希
Masaki Wakao

1961年生まれ。1983年愛知教育大学教育学部卒。
1988年東北大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（文学）。
東北大学文学部助手、富山大学人文学部助教授を経て、98年一橋大学社会学部助教授となる。
研究領域は、日本近世史、日本思想史、政治思想史。書物を史料とする歴史叙述の可能性を広げるため、
2003年より「書物・出版と社会変容」研究会を主宰、専攻を異にする多彩な研究者との協業をすすめている。
主な著書に『「太平記読み」の時代―近世政治思想史の構想』（平凡社'99）、
『安藤昌益からみえる日本近世』（東大出版会'04）など。